山形県内の保険薬局におけるお薬手帳の活用度調査

小嶋文良^{*1}, 櫻井可奈子², 伊藤順子³, 岡寄千賀子⁴, 武田直子⁵, 半田貢康⁶,
武田真美子⁷, 相原由香⁸, 峯田 純⁹, 東海林徹¹, 仲川義人¹, 渡辺康弘¹⁰
山形大学医学部附属病院薬剤部¹, あおぞら薬局², スマイル薬局³, エイブル薬局⁴,
山形県立新庄病院薬剤部⁵, 小白川至誠堂病院薬局⁶, ヤマザワ薬局⁷,
萬屋薬局⁸, レモン調剤薬局⁹, 山形県薬剤師会¹⁰

Effectiveness of Medication Notebooks Distributed to Health Insurance Pharmacies in Yamagata prefecture

Fumiyoshi Ojima^{*1}, Kanako Sakurai², Junko Itoh³, Chikako Okazaki⁴, Naoko Takeda⁵,
Mitsuyasu Handa⁶, Mamiko Takeda⁷, Yuka Aihara⁸, Jun Mineta⁹, Tohru Shoji¹,
Yoshito Nakagawa¹ and Yasuhiro Watanabe¹⁰

*Division of Pharmacy, Yamagata University Hospital¹, Aozora Pharmacy², Smile Pharmacy³,
Able Pharmacy⁴, Division of pharmacy, Yamagata Prefecture, Shinjo Hospital⁵,
Division of pharmacy, Kojirakawashiseido Hospital⁶, Yamazawa Pharmacy⁷,
Yorozuya Pharmacy⁸, Lemon Pharmacy⁹, Yamagata Pharmaceutical Association¹⁰*

[Received November 10, 2004]
[Accepted January 29, 2005]

A medication notebook was prepared by the Yamagata Pharmaceutical Association in cooperation with the Hospital Pharmacy Association, Medical Association and Dental Association, and distributed to registered health insurance pharmacies and medical institutions, including those operated by individual medical practitioners, for the purpose of sharing pharmaceutical information on patients in Yamagata Prefecture. In addition, a questionnaire concerning the usage rate of the medication notebook and its usefulness was sent to the 411 health insurance pharmacies registered with the Yamagata Pharmaceutical Association. Responses were obtained from 192 pharmacies (response rate 46.7%). More than 40% of these pharmacies had distributed the Yamagata Pharmacy Association medication notebook to patients. Through the use of the medication notebooks, patients were able to avoid duplication of medication and drug interactions. It was therefore useful in promoting the proper use of medicines by patients. Among pharmacies staffed by only one pharmacist, a large number had not given out the medication notebook to patients, but there were also many that were using it effectively. Pharmacies that used the medication notebook more frequently had higher rates for avoiding the improper use of medication. It is thus necessary to further educate pharmacists on the value of using the medication notebook in promoting the proper use of medicines, since this will help to avoid duplicated prescriptions, drug interactions and adverse effects in patients.

Key words — duplicated prescription, health insurance pharmacy, medication notebook, proper use of medicines.

緒 言

お薬手帳は、自分が処方されている薬の内容を患者自身が正確に把握できるだけでなく、医療機関や保険薬局において薬歴、副作用歴やアレルギー歴等を記載し、他の医療機関を受診した際に提示することによって、患者自身がより正確な情報の提供を可能にする。これは、受診する医療機関と保険薬局との間で患者を中心とした情

報を共有化することになり、医薬品の適正使用を高める結果となる¹⁻³⁾。高齢化社会がさらに進むことにより、複数の診療科や医療機関を受診する患者の増加と院外処方せん発行の増加にともない、かかりつけ薬局の役割は一層重要となり、お薬手帳の意義は大きいと考えられる。実際にお薬手帳によって薬剤に関する有害事象を回避できた例も報告されているが、受診時や薬局に来た際に提示しない、複数のお薬手帳を持っている等の問題点も指摘されている⁴⁻⁷⁾。

* 山形市飯田西 2-2-2 ; 2-2-2, Iida-Nishi, Yamagata-shi, 990-9585 Japan

山形県では平成12年に山形県薬剤師会が中心となり、山形県病院薬剤師会、医師会、歯科医師会の協力を得て「かかりつけ診療お薬手帳」(以下、お薬手帳と略す、**Fig. 1**)を作成し、希望する医療機関(個人医院を含む)や保険薬局に配布し、薬歴管理、服薬指導等に利用している。作成後4年が経過し、その活用度を調査するために山形県内の保険薬局を対象にアンケート調査を行った。今回、その結果として、特に薬剤師数、ならびにお薬手帳への記入率との関連について解析を行った。

方 法

アンケート調査方法

平成16年4月27日から5月17日までの間に、山形県内の県薬加盟の全保険薬局を対象に選択式のアンケート調査を行った。アンケート内容は**Fig. 2**に示すように、薬剤師数、1日当たりの平均受付処方せん枚数、お薬手帳への記入状況とその内容、お薬手帳の種類および配布状況、有害事象の回避の有無、および回避した有害事象の内容とし、各薬局へファクス送信し、ファックスもしくは郵送にて回収した。なお、アンケート用紙は勤務薬剤師数に関係なく1薬局当たり1枚とした。アンケート調査対象は411薬局であり、192薬局より回答を得た(回収率46.7%)。

結 果

アンケート調査結果

調査対象薬局の薬剤師数は1名が41.1%、2名が31.8%であり、7割以上が2名以下の薬局であった。1日当たりの平均受付処方せん枚数は40枚以下が31.3%、41から80枚までが約37.9%であり、回答は比較的小規模の薬局から多く得られた(**Table 1**)。全体のお

薬手帳の記入率は25%以下が40.4%であり、約3割の薬局は半数以上(51%以上)に記載しているとの回答であった。記入していない薬局は薬剤師数が1人のところが最も多かったが、76%以上に記入しているところも1人薬剤師のところが最も多かった(**Table 2**)。処方内容以外にお薬手帳に記載する内容として最も多かったのは相互作用であり、ついで副作用、薬効の順であった(**Table 3**)。お薬手帳を所持していない患者への配布率は半数以下が45.2%であり、51-75%は21.9%、76%以上は20.9%であった。1人薬剤師の薬局では、ほとんど渡していないとの回答(15.2%)も複数薬剤師の薬局に比較して多かったが、ほとんどすべての患者に渡している薬局の数(12.7%)も多かった(**Table 4**)。また、配布しているお薬手帳は40.2%が山形県薬剤師会作成であり、次いでチェーン店を含む薬局オリジナルお薬手帳、日薬のお薬手帳であった(**Table 5**)。手帳を配布する対象としては、お薬手帳の希望患者が最も多く、次いで手帳を持っていない患者全員、複数の医療機関を受診している患者、慢性疾患患者であった(**Table 6**)。お薬手帳によって有害事象が回避できたとの回答は147件(76.6%)であり、薬剤師数には関係なかった(**Table 7**)。その内訳は重複投与の回避が最も多く、相互作用、副作用回避の順であり、薬剤師数とは関係なく有害事象を防ぐことができた(**Table 8**)。また、お薬手帳への記入率と配布率、さらに有害事象回避率を調べたところ、お薬手帳記入率が増加するにつれて、配布率も増加するとともに有害事象の回避率も増加する傾向が認められた。お薬手帳への記入や配布していないところは薬剤師数が1名の薬局が多かったが、1名の薬局でも積極的に配布、記載しているところも認められた(**Table 9**)。

考 察

お薬手帳は日本薬剤師会、日本病院薬剤師会をはじめとして、地域の薬剤師会や薬局独自に作成した手帳も見られ、いずれも有効に利用されており、地域によっては医師からもその有用性が認められている^{8,9)}。山形県では平成12年に県薬剤師会と病院薬剤師会が中心となり、県医師会、県歯科医師会と共同でお薬手帳を作成し、保険薬局のみならず、病院薬局はもちろん、医師会、歯科医師会にも配布している。しかし、その請求状況をみると、残念ながらすべての医療機関から認知されるまでには至っていない。また、配布しているものの一方的なものであり、薬剤師会としては実際にどれくらい利用され、どれくらい有用であるか把握していない。そのため、今回保険薬局を対象に、お薬手帳に関するアンケート調査を実施した。

山形県内のお薬手帳の配布率、利用率に関していえ

Fig. 1. 山形県医師会、歯科医師会、薬剤師会が共同で作成した「かかりつけ薬局診療お薬手帳」

保険薬局を対象としたアンケート調査内容

- 問1：勤務薬剤師数は？
 回答：①1人， ②2人， ③3人以上
- 問2：1日当たりの平均受付処方箋枚数は？
 回答：①40枚以下， ②41枚～80枚， ③81枚～120枚，
 ④121枚以上
- 問3-1：1日当たりの手帳記入率は？（手帳記入処方箋枚数／受け付け枚数（％））
 （自分の薬局で初回に配布し記入したものを除く。）
 回答：①ほとんどなし， ②25％以下， ③25～50％，
 ④50～75％， ⑤75％以上
- 問3-2：問3-1で，②～⑤記入している，と答えた方へ。
 問：処方内容以外に手帳に書き込んでいる情報内容は？（複数回答）
 回答：①薬効， ②相互作用， ③副作用， ④禁忌薬，
 ⑤その他（具体例）
- 問4-1：薬局で手帳を配布している患者の割合は？
 回答：①ほとんどなし， ②50％以下， ③51～75％，
 ④76％以上， ⑤ほとんどすべて
- 問4-2：問4-1で配布していると答えた方へ（②～⑤）。
 問：その手帳はどこで作った手帳ですか？
 回答：①県薬剤師会， ②日本薬剤師会， ③当該薬局，
 ④地域の薬剤師たち， ⑤その他（具体例）
- 問4-3：問4-1で配布していると答えた方へ（②～⑤）。
 問：お薬手帳を配布する患者の基準は？（複数回答可）
 回答：①手帳を持っていない患者様全員， ②患者様の希望， ③薬に興味のある患者， ④他の医院にかかっている患者， ⑤薬物アレルギーのある患者， ⑥慢性疾患の患者， ⑦その他（具体例）。
- 問5-1：お薬手帳の情報によって、実際に重複投与、相互作用等の有害事象が回避できたことがありますか？
 回答：①ある， ②ない
- 問5-2：問5-1で①ある．と答えた方。
 問：回避できた内容は？（複数回答可）
 回答：①重複投与回避， ②相互作用回避（重複投与以外），
 ③副作用回避， ④調剤形態（1包化・粉碎など）
 ⑤その他（具体例）

Fig. 2. 保険薬局へのアンケート調査内容

Table 1. 調査対象薬局の薬剤師数と1日の処方せん枚数

薬剤師数	(%)	処方せん枚数	(%)
1人	41.1	40枚以下	31.3
2人	31.8	41～80枚	37.9
3人以上	26.6	81～120枚	19.8
未回答	0.5	120枚以上	8.9
		未回答	2.1

(n=192)

ば、まだ半数にも満たないのが現状であることが判明した。一部ではあるが、中にはまったく患者に配布していない薬局も認められた。お薬手帳は重複投与や相互作用といった有害事象を発見し、副作用を未然に防ぐことが可能であり、本調査でもそのような経験があるとの回答

が147件寄せられている。本調査の回収率は約47%とほぼ半数であり、その中でもこれだけの有害事象を経験していることより、回答を寄せた薬局以外でも経験している可能性が大きく、また見逃されているケースも予想される。回答を得た薬局の薬剤師数をみても分かるように、本調査で得られた回答は1人薬剤師の薬局が約4割であり、2人薬剤師を含めるとその割合は7割以上であるため、時間的な余裕がないことも事実であろう。しかし、薬剤師が1人でも積極的に配布、記入し、さらに重複投与等を発見している薬局も認められ、患者へのお薬手帳の記載、配布は1人でも可能である。なお今回の調査より、お薬手帳をほとんど渡していない薬局でも重複投与や相互作用を回避できた経験のある薬局は4割以上で認められた。保険薬局では薬歴を作成しており、かか

Table 2. 薬剤師数とお薬手帳記入率

薬剤師数	記 入 率 (%)					未回答
	記入しない	25%以下	26-50%	51-75%	76%以上	
1人	14.1	37.2	17.9	14.1	16.7	1.3
2人	6.6	37.7	18.0	21.3	11.5	4.9
3人以上	2.1	53.2	14.9	25.5	12.8	0
全 体	8.9	40.4	16.7	18.8	13.5	2.1

(n=192)

Table 3. 薬剤師数と処方内容以外の記載事項

薬剤師数	回 答 件 数					未 回 答
	薬 効	相互作用	副 作 用	禁 忌 薬		
1 人	35	37	28	9		14
2 人	20	25	24	6		9
3人以上	17	30	23	4		5
全 体	72	92	75	19		28

(複数回答)

Table 4. 薬剤師数とお薬手帳を所持していない患者への配布率

薬剤師数	記 入 内 容					未回答
	ほとんど無し	50%以下	51-75%	76%以上	ほとんど全て	
1 人	15.2	40.5	21.5	7.6	12.7	2.5
2 人	8.2	44.3	23.0	13.1	8.2	3.3
3人以上	2.0	54.9	21.6	17.6	3.9	0
全 体	9.4	45.2	21.9	12.0	8.9	2.6

(n=192)

Table 5. 配布している手帳の種類

手帳の種類	(%)
県薬作成	40.2
日本薬剤師会	9.9
薬局オリジナル	16.1
地域の薬剤師会	0.5
その他	25.5
未回答	7.8

(n=192)

Table 6. 手帳配布対象

配 布 対 象	件数
手帳を持っていない患者全員	54
お薬手帳の希望患者	138
薬に興味を持っている患者	28
複数の施設を受信している患者	75
アレルギー性疾患患者	27
慢性疾患患者	39
その他	13
未回答	14

(複数回答)

Table 7. 薬剤師数と有害事象の回避経験

薬剤師数	有害事象の回避経験		
	経験あり	経験無し	未回答
1 人	57	21	1
2 人	47	12	2
3人以上	43	8	0
全 体	147	41	3

(n=192)

Table 8. 薬剤師数と回避できた有害事象の内容

薬剤師数	有害事象回避の件数			
	重複投与	相互作用	副作用	その他
1 人	52	23	9	3
2 人	46	24	7	3
3人以上	41	26	5	2
全 体	139	73	21	8

(複数回答)

りつけ薬局が十分に実践されていれば、お薬手帳がなくても有害事象は回避できる。しかし、お薬手帳を積極的に利用している薬局では9割近い薬局が有害事象を回避できており、お薬手帳が薬剤の適正使用に寄与していることを示していると考えられる。有害事象を回避することは患者の薬局に対する信頼にもつながり、お薬手帳は積極的に活用していかなければならない。また、お薬手帳以外にも健康手帳、糖尿病手帳、血圧手帳等の複数の

手帳を所持している患者もあり、血圧や検査結果はそちらに記載する場合や記録が面倒である等の問題もある。しかし、お薬手帳以外は基本的には患者自身が記載するものであるのに対し、お薬手帳は主に医療者側の薬剤師が記載するものであり、その意味では患者の負担は少ないと考えられる。有料であればいないという患者も存在するが、患者からもその有用性は認められている報告もあり^{5,7)}、本県薬剤師会としてもさらなる普及に努め

Table 9. お薬手帳記入率と配布率, ならびに有害事象回避率

お薬手帳記入率	薬剤師数 (回答件数)			お薬手帳配布率 (%)					有害事象回避率 (%)
	1人	2人	3人以上	ほとんど無し	50%以下	51-75%	76%以上	ほとんど全て	
記入していない	11	4	1	56.3	31.3	6.3	0	0	43.8
25%以下	29	23	26	11.5	84.6	1.3	0	1.3	76.6
26-50%	14	11	7	0	37.5	43.8	9.4	3.1	78.1
51-75%	11	13	12	0	2.8	63.9	25.0	8.3	87.1
76%以上	13	7	6	0	7.7	11.5	42.3	38.5	88.5

なければならない。他県のお薬手帳に関する調査の中では配布率が7割以上の報告もあり^{5,9)}, その結果と比較すると山形県の普及率は決して高いものではないため、薬剤師会や病院薬剤師会の研修会等を通じ、その普及に努めなければならない。なお、お薬手帳は健康保険証とほぼ同じ大きさであり、携帯に便利であるものの、患者情報に関してICカード化による地域としての一元管理も進められており、将来的にはカード化も視野に入れる必要がある¹⁾。しかし、現時点ではICカードは全国的に普及するには至っておらず、患者本人が必要なときに内容見ることができない。さらに地震等の災害時にはデータベース自体が使用できない危険性もあり、ICカード化に関しては今後の動向を見守る必要がある。

お薬手帳は保険薬局だけの問題ではなく、患者を中心として医療機関との情報の共有化を図るものである。そのため、病院での退院時指導の際のお薬手帳の利用を定着させるためにも、今後病院薬局におけるお薬手帳の利用状況や患者の理解度、認識等の調査を行い、不備な部分は改良していく必要がある。さらに、お薬手帳は日本薬剤師会、日本病院薬剤師会をはじめとして、地域の薬剤師会や薬局独自に作成した手帳も認められるが、医師会、歯科医師会と共同で作成したお薬手帳は他県ではほとんどみられない。作成に協力していただいた医師会や歯科医師会における認知度や普及率、要望等の調査を行い、どのような医療機関でも使用できるようにさらに使いやすいお薬手帳へ改善していかなければならない。

謝辞 日常の業務等の忙しい中、アンケート調査にご協力いただいた山形県薬剤師会所属の保険薬局の各先生方に深謝いたします。

引用文献

- 1) 漆畑稔, 患者情報の共有化「薬剤師が進めよう」, 日本薬剤師会雑誌, **53**, 301-304 (2001).
- 2) 川原敏幸, クリニカルファーマシーのための薬・薬連携, 2) 外来患者に必要な薬学的管理と薬・薬連携, 2) 開局薬剤師の立場から, 医薬ジャーナル, **38**, 2671-2676 (2002).
- 3) 有山良一, 森田徹, 西川能治, クリニカルファーマシーのための薬・薬連携, 4. 薬・薬連携活動の実例報告, 2) 横浜市立病院～薬・薬連携の実際～, 医薬ジャーナル, **38**, 2703-2711 (2002).
- 4) 丹羽孝司, 足立哲夫, 高橋千恵子, 中村誠, 田頭正至, 窪田傑文, 平野和行, 岐阜薬科大学附属薬局で行った疑義照会内容の分析, 薬学雑誌, **121**, 837-844 (2001).
- 5) 足立哲夫, 丹羽孝司, 田頭正至, 窪田傑文, 原宏和, 平野和行, 岐阜薬科大学附属薬局における「お薬手帳」の利用状況, 医療薬学, **28**, 161-171 (2002).
- 6) 飯嶋久志, 安藤秀人, 伊井正巳, 伊藤均, 石井一昭, 千葉県薬剤師会会員薬局における医薬品情報源とお薬手帳の活用に関する調査, 医療薬学, **29**, 544-551 (2003).
- 7) 竹内尚子, 鎌田勝久, 関香織, 実際薬学, 精神科の服薬指導, 精神神経科受診患者に対する薬剤情報提供およびお薬手帳に関するアンケート調査報告, 薬局, **53**, 2232-2237 (2002).
- 8) 前東憲子, クリニカルファーマシーのための薬・薬連携, 3. 在宅医療患者に必要な薬学的管理と薬・薬連携, 2) 「お薬手帳」による薬・薬連携から「在宅医療希望患者のための医療連携」構築への参画, 医薬ジャーナル, **38**, 2687-2692 (2002).
- 9) 山浦克典, 増田道雄, 本橋克, 倉持欽也, 石塚とみ子, 染谷敏文, 菅沼康次, 本橋元, 岩井市におけるお薬手帳活用状況とお薬手帳の有用性, 薬学雑誌, **123**, 151-155 (2003).